

小澤 勲・土本亜理子 著

物語としての痴呆ケア

藤 谷 順 子 (国立国際医療センターリハビリテーション科)

著者によると、本書は前著書「痴呆を生きるということ」(岩波新書)の続編であり、そこで「書ききれなかった」「痴呆ケアの技術面」を書いたものであるという。筆者はたまたま前著の読者であるが、この本は、前著をお読みでない方にも十分お勧めできる。

リハビリテーション関係者として嬉しいのは、著者が、「痴呆ケア」のあるべき姿をリハビリテーションになぞらえて描いているところである。著者によれば、リハビリテーション学においては、さまざまな障害をもつ各個人に対して、個別の計画、実践、評価、方法を選択するための膨大な知識の蓄積があり、専門職も存在していて、例えば歩行障害があれば、それに対して適切な杖なり補助具が処方される。それと同様に、痴呆の症例についても、痴呆によってもたらされる各障害を評価し、対応し、残った障害に対しては「知的補助具」を提供するところまで痴呆ケアというものを到達させたい、と述べている。

その観点に立って、本書は、痴呆の症状、とくに中核症状を挙げて解説することに重きを置き、後半で、中核症状や周辺症状に対する実際の取り組みについて紹介している。中核症状としては、一般的に挙げられている見当識障害、記憶障害、言葉・数の障害、および認知機能の低下を挙げたあとで、著者ならではの経験と洞察によって捕らえられたものとして、

- ・身体的不自由：エネルギー不足・偏頭痛
- ・奥行き知覚の障害
- ・感覚の取捨選択の障害

- ・覚醒度のゆれと情動のコントロール不全
- ・「同時進行人間」の崩れ
- ・全体的な把握の困難
- ・人の手を借りることができない
- ・症状を自覚できない(情動的には自覚している)
- ・知的な「私」の壊れ、などを挙げており、それらの記述は平明で明解である。

さらに著者は、中核症状は脳の障害であるが、廃用の要素もあり、治す努力を払うべきこと、かつ、ケアにおいてはこれらの症状を配慮して、生活が支障なく(かつ希望通り)送れるようにカバーするようなケア計画を立てることが必要である、と述べている。インペアメントとディスアビリティへの同時アプローチ、廃用症候群への対応など、リハビリテーションの観点と共通するものであり、痴呆症例への対応に取り組むうえでの示唆に富んでいる。

ところで、この本の成立過程自体が、「障害の理解」と「知的補助具」の利用のよき見本ではなかろうか、とも思う。肺がんのために、書きたくても「とうてい活字と取り組めない」、「楽しいはずの会食すらしんどいことがある」体力の低下を自覚した著者が、土本亜理子さんという共著者を選び、彼女の協力によって、そしてまた彼女との共同作業によって単著とは一味違う好著を世に出したのである。

常に実践を説く小澤勲先生が、闘病中にもかかわらずまとめられたこの労作に、心からの敬意を表したい。

[四六 頁 320 1,890 円(本体 1,800 円+税 5%) 2004 三輪書店刊]